| 取組名：みらいつくり大学校　定期講座等 |
| --- |
| 団体名：医療法人稲生会（みらいつくり大学校） |

１．趣旨・目的

障害当事者の学びのニーズを踏まえた講座内容、実施方法及び合理的配慮を含む必要な支援を踏まえた、多様な学びの機会の拡充方策の推進に資することを目的に、障害の有無にかかわらず参加できる講座等を継続的に開催した。

２．開催方法

・オンライン配信による開催を中心としながら、定期的に複数種類の講座等を実施した。
・開催案内をホームページ上で周知したほか、チラシを作成し関係機関等へ配布した。
・障害の有無に関わらず、ともに学ぶ場をつくっていく機会につながるよう、当事者が企画し運営する講座も実施するなど、双方向的な学びの機会拡充に努めた。
・開催後は、みらいつくり研究所 HP などで開催報告を実施した。

３．開催内容

・【みらいつくり哲学学校】担当：土畠、吉成　開催回数：17 回、開催頻度：月２～４回
課題図書を読み進めながら、内容報告や参加者全員での議論を通し、哲学について学ぶ講座。
・【オタクの語り場】担当：吉成　開催回数：８回、開催頻度：月１回
障害当事者の発案・運営のもと、参加者が趣味や熱中していることへの思い等を語り合う会。
・【みらいつくり読書会】担当：松井　開催回数：８回、開催頻度：月１回
古典や児童文学など皆で決めた課題作品を読み、参加者同士で感想等を議論する会。
・【オンライン＊ハワイアン】担当：浅里　開催回数：８回、開催頻度：月１回
２名のフラ講師を招き、ハワイの歴史や文化を学び、椅子に座りながら踊るチェアーフラなどを含めて、参加者が自由にフラを体験する講座。
・【メタバでダベろう】担当：土畠　開催回数：６回、開催頻度：月１回
各参加者が自分の分身であるアバターを作成し、メタバースで交流する会。
・【アイヌ語講座】担当：土畠　開催回数：５回、開催頻度：月 1 回
アイヌの方を講師に招き、アイヌ語による会話など通して、アイヌの言語や文化を学ぶ講座。
・【お手話べり】担当：土畠　開催回数：５回、開催頻度：月１回
手話を使って「お手話べり（おしゃべり）」する講座。
・【たらこ湯起業を追いかけて_伴走型講義】担当：松井　開催回数：全３回
虎杖浜にて温泉付ゲストハウス「たらこ湯」の開業を控えた吉原和香奈さんを講師に迎え、障害の有無によらずともに働くことについて考える講義。
・【アイヌバスツアー】担当：久保　開催回数：１回、開催頻度：年１回
車椅子のまま乗車ができる福祉車両のバスをレンタルし、障害の有無によらず楽しめるツアー。
今年度はアイヌ文化交流センターと定山渓温泉街を行き先とした。（※詳細は別途記載）
・【北海道科学大学 キャンパスツアー】担当：西　開催回数：１回、開催頻度：年１回
北海道科学大学の校内と学食体験のツアー。ユニバーサルトイレや昇降機の乗車も行った。
※他にも「アイヌ食講座」、「しさくの広場」、「音楽講座」などを開催。

オンラインでの講座開催を始めた 2020 年から継続して行われている講座が多くあり、哲学学校はこれまでに 100 回以上、読書会や映画同好会は各 70 回以上の開催回数となった。
今年度は、メタバースを活用した語りの場「メタバでダベろう」、障害の有無によらずともに働く

ことについて考える「たらこ湯起業を追いかけて_伴走型講義」、「北海道科学大学キャンパスツアー」の活動を新たに開催した。

## ４．成果と課題

〈成果〉

・今年度は期間内に 15 種類以上の講座等を設け、計 80 回以上の開催となった。

・コロナ禍に入ってからの約４年、オンラインを利用して講座や活動を実施してきた。今年度はコロナウイルスの５類移行もあり、対面で実施する活動も少しずつ増えてきた。昨年度から行っている「アイヌバスツアー」では、障害当事者のほか、道外や国外からの幅広い参加があり、オンラインで講座に参加していた人同士が顔を合わせて交流する機会にもなった。

・年単位で継続している講座も多いことから、参加者が顔なじみになりつつあり、講座内外でのコミュニティの醸成にもつながっている。「アイヌ語講座」や「お手話べり」では、数年間継続している中で、オープンチャットなどからの新規参加もあり、継続することによって、障害当事者の学習要求などを踏まえた活動の展開が期待できるほか、障害の有無によらずともに学ぶ場をつくるための課題等の検討もできる。

・今年度の新企画について、「メタバでダベろう」では、メタバースというプラットフォームの活用によって、筋ジス病棟で長期入院中の障害当事者の参加もあった。「たらこ湯起業を追いかけて_伴走型講義」では、聴覚障害当事者の起業についての話を聞く場となり、新たな障害当事者の参加もあった。「北海道科学大学キャンパスツアー」では、来年度の本格的な学習プログラムの実施を見据えた事前開催となったが、障害当事者の参加もあったなかで実際にキャンパスを訪れ、職員とのやり取りをすることができた。

〈課題〉

・より多くの障害当事者や新規の方が参加しやすい講座等となるための検討が必要

・オンライン開催と対面開催のメリット、デメリットを踏まえた運営体制・運営方針の検討が必要

・講座等の運営について、持続可能性や活動内容・方法などについての検討が必要

## ５．合理的配慮・工夫

・オンライン上で、マイクやビデオ画面をオフにして聞きながら学ぶ「ラジオ参加」や、後からアーカイブ動画をみて学ぶ方法も推奨するなど、各個人の状況に応じた参加を可能とする工夫をした。

・「オタクの語り場」では、声を出しにくい方や、話すことが難しい方のために、チャットを活用したコミュニケーションやグーグルフォームでの事前回答を受け付けている。

・「北海道科学大学キャンパスツアー」や「アイヌバスツアー」などの対面形式で行なわれる講座では、事前に車椅子用トイレの様子などを共有することで、参加を検討する段階からトイレに関する情報を知ることができるようになっている。

## ６．運営体制

・運営責任者１名（北海道教育委員会との連絡調整）

・運営担当者６名（各講座の主担当、もしくは外部の講師とともに講座を実施する運営補佐の役割）

※上記の者の他に複数名を加え、月ごとに定期的な打ち合わせを行い、情報共有を行った。

## ７．その他取組の詳細（HP 公開情報など）

○医療法人稲生会　みらいつくり大学校 HP：https://futurecreating.net/

※右の二次元バーコードからも閲覧可能です。

| 取組名：みらいつくり大学校×アイヌ語講座×アイヌ食講座<br>札幌アイヌ文化交流センター（ピリカコタン）＆定山渓温泉街見学バスツアー |
| --- |
| 団体名：医療法人稲生会（みらいつくり大学校） |

## １．趣旨・目的

・障害当時者のニーズや合理的配慮による支援を踏まえたインクルーシブな学びや体験の機会の拡充
・当事者に付き添う介助者や、周りで関わる人の支援、社会教育施設の支援体制等の調査研究

## ２．取組内容

みらいつくり大学校で定期開催している講座（アイヌ語講座やアイヌ食講座）で学んでいるアイヌ文化に関する学びを更に深めるため、札幌アイヌ文化交流センター（ピリカコタン）とアイヌの道案内により発見されたとする定山渓温泉街への日帰りバスツアーを実施した。準備を含めた取組内容は次のとおり。

（１）ツアー先の選定
・場所については、事前アンケート調査を参考に、必要な配慮や移動時間等を踏まえ選定した。

（２）現地調査（下見）
・利用施設のバリアフリー状況等を確認するため、事前に現地調査（下見）を行った。その際に、受け入れ側に対して当事者目線の情報を提供したほか、改善・対応が必要なことについての確認・協議を行った。

（３）参加者の募集
・みらいつくり大学校の講座参加者、昨年度の参加者に募集案内をしたほか、医療的ケアが必要な方々でアイヌ文化や学びに興味のある方々に個別の声かけを行い、参加者を募集した。

（４）ツアーの実施
・アイヌ民族の方による説明のもと、施設見学、展示品に実際に触れる体験等をした。
・昼食は、定山渓温泉街にあるお店を利用し、その後は温泉街を自由に探索した。

## ３．成果と課題

〈成果〉
・今回の機会を通して当事者目線の情報が提供されたことで、受け入れる側が課題意識を持ち、バリアフリーな利用について理解し、改善する機会となった。
・屋外での体験参加型の学習を通して、障害の有無によらない学びの場に必要な支援や合理的配慮等について、運営者のみならず参加者や施設担当者も学ぶことができた。
・当日のバス内でレクリエーションを実施し、講座参加者の中学生に担当してもらい、アイヌ文化に関するクイズ等を行うことで、移動中にも参加者がともに楽しむことができた。
・今年度は海外からツアーに合わせて来日した参加者がいた。道内外から障害の有無に関わらず、25 名が参加し、様々な交流の機会となった。
・「日常、外出する機会がない当事者にとって外に出て移動すること自体が貴重な経験、学びである」といった感想を得た。
・本取組の様子をまとめた動画を作成し、YouTube 上でも公開した。
※動画リンクは「６．その他取組の詳細（HP 公開情報など）」のとおり
・昨年度実施した平取町二風谷コタンへのバスツアーを踏まえ、移動時間を１時間以内となるよう見直しをしたことで、移動にかかる障害当事者の身体的負担を軽減することができた。
・コロナ禍を経て、2022 年度に対面して集まる活動として始まったアイヌバスツアーについては、定期開催をしているアイヌ語講座やアイヌ食講座の参加者だけではなく、別の講座に参加してい

る方々が顔を合わせて集う機会となっている。オンラインで集まっていた方々が初めて対面して会うことができたり、違う講座に参加している方々がツアーで初めて出会ったり、各講座の横串となるようなイベントであると言える。

〈課題〉

・今年度はチラシを作成せず、申込フォームに行き先や当日のスケジュールなどを記載したが、視覚的にチラシがあった方がツアー案内や詳細等がわかりやすいと感じた。

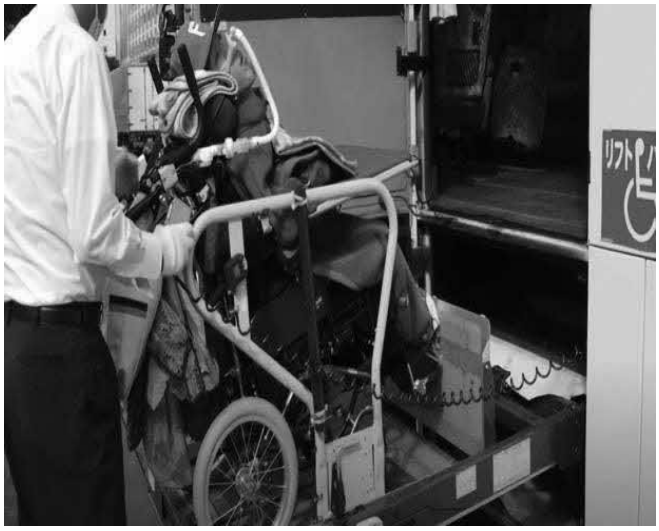
・昼食会場について、スロープや車椅子専用のトイレが備えられているお店を探すのに苦労した。定山渓温泉街のホテルなどにユニバーサルシート付きのトイレは少なく、あったとしても宿泊者専用などで利用を断られることがあった。定山渓温泉街の公衆トイレにもユニバーサルシート付きのトイレはなく、折りたたみ式の簡易ベッドを持ち込む必要があった。（新しく新設された車椅子用のトイレにも設置はなかった）

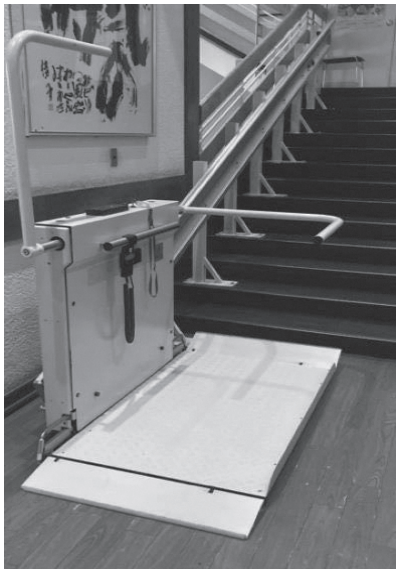
・昼食を提供する順番について、障害当事者の中には食事に時間がかかる場合もあることから、店側との事前の情報共有が必要であった。

・定山渓温泉街の足湯にはスロープがついている場所が１箇所あるが、途中までしか無いため、車椅子の方が足湯を利用することは難しかった。

・成果として記載したとおり、参加者の身体的負担に配慮し、移動時間を１時間以内に収められるようツアー先を選定した。その一方で、障害当事者が１時間以上の移動を伴うツアーには、トイレの問題や同じ姿勢でいることによる身体的負担、ヘルパー時間の確保などを理由に参加しにくい現状があることもわかった。特に、広い北海道で移動時間が１時間以内までの範囲に体験的な学習の機会が制限されるとなると、学習機会を保障する観点からも大きな課題があると言える。合理的配慮の視点とともに、基礎的環境整備をいかに進めていくのかといった、具体的な環境改善が必要であることの周知をいかに促すのかといった課題も明らかとなった。この点については、昨年度と今年度で、障害がある方々の受け入れに関する意識の地域差を痛烈にも感じる機会となった。なぜ地域差が生まれるのかといった視点から調査研究を行うことも今後必要な視点であることがわかった。

## ４．取組の様子

| 福祉バス | |
|---|---|
|  | |
| 実際の昇降の様子 | 福祉バスの車内<br>隣に介助者が座ることはできず前後になる |

| 合理的配慮や工夫の例 | |
|---|---|
| |  |
| 普段は添乗員の休憩室として利用している部屋をオムツ交換の場所として貸してもらった（ぬくもりの宿ふる川） | 昇降機（ぬくもりの宿ふる川） |

**施設見学・昼食**

見学先：アイヌ文化交流センター（ピリカコタン）

・アイヌアドバイザー派遣を利用し、ピリカコタン内のガイドを依頼（早坂ユカさん）。
　アイヌの歴史や文化の説明、博物館内にある展示品の説明をしていただいた。

昼食会場：埜ノ山キッチンはるらんな（定山渓温泉街）